

# ハウオールド

## アーユー?

川崎 秀子

人が私の事についてよく尋ねるものに二つある。一つは、私がこの年齢? になって結婚をしていないし、またそれについて関心を持っているように見えないことである。その中には善意というか卒直な人がいるのである。このあいだ三日前に道で会って私の年齢を尋ねたばかりの人に、またバスの中で会ってしまった。内心やばいと思いつつあいさつをしていると、ご丁寧にも大衆の面前で「もういくつにならったん」ときた。お世話をして下さるのかと遠慮がちに答えると、「あら、もう〇〇歳、そんならええお話もないわ、女は年齢が問題やからネ、まあ二十六位までやね」とおっしゃる。私もこの位の事では傷のつかない年になっているがひどい話である。

実際、女性の年齢を何かの条件にしようとする人が多く、若い女性でも初対面から相手の年齢を尋ねたがるし、人生の先輩をイチビッたりする。余程、自分の年齢が自慢なのだ

ろう。

日本人が異常に相手の年齢を聞くので、某大学でフランス語の教鞭をとっているフランス人は、そのことにとても驚いたらしい。

最近では年のことを尋ねられると、「貴方、私に気があるのでしょうか。だからそんなこと聞くのでしょうか。」と、男女の別なく聞かれた人に言うことにしているそうである。

二つめによく尋ねられるのは、私が借金をして都心のマンションを購入し、一人で生活していることについてである。年配の男性からは「独身女性のマンション暮らし」と揶揄されるし、年上の女友達からは、「給料の事も考えずによう買えたなあ、さすがは、大阪の商売人の子や」と変なほめられ方をした。購入の動機は、今さらながらと思うけれども両親の元気なうちに、親ばなれ・子ばなれをし、いずれは一人ぼっちになるかも知れない想定をして気力・体力に余裕があるうちにそれぞれ自分で人生を楽しむ練習をするためである。こんな事を言うとう友達からは、「そんな事を考えてるから結婚でけへんのやんか」と叱られ、また彼女達夫婦の仕合せを見せつけられるのである。

しかし家の方では次の様なことがあってか

ら結婚のことをやかましく言わなくなった。

母は自分がすこし元気になった頃に、思いついて一緒に育った従兄の見舞いに行った。彼は妻をガンでなくしてから脳軟化症になり、自分が院長である病院の一室で専任の付添人の世話を受けていた。彼のたった一人の娘は20キロメートル程はなれた所で病院勤めの夫と暮らしているが、一・二週間に一度尋ねてくるようであった。病室は薄暗く、自分では喋ることもどうする事もできない寝たきりであった。しかし食欲には制限がなく、付添人に叱られながらも犬が呻く様に要求する姿を見て、母はあまりの変わり様に涙を抑えることができなかった。また自分の愛娘の前では大人しくするので区別できているらしく、その事が一層ひどく胸をいためる話であった。

「羨しいと思っていた人でも死ぬ時は同じやわ、ひとりて死ななあかんのやから」と、母は自分に言い聞かせる様に話すのである。

(かわさき ひでこ 本学図書館司書)